

## 「トロイアの女」(エウリピデス)

トロイア戦争がギリシャの勝利に終り、トロイアの男達は皆殺しにされ、女達は奴隷或は夜伽の相手としてギリシャに連れ去られる事になつた。舞臺は夜も明けやらぬ頃のトロイア城外。トロイアの女の捕虜達がギリシャ軍の天幕の中に收容されてゐる。天幕の外でトロイア女王ヘカベが「國を失ひ、子らも夫も失つた」悲運を嘆いてゐると、ギリシャ軍の布告官が登場し、ヘカベやその娘達それぞれの新たな主の名を告げて、女達を天幕から連れ出す。

まづはヘカベの娘の豫言者カサンドラが出て来る。彼女を所望したのはギリシャ軍總大將アガムノンであつたが、この狂へる娘はアポロンの巫女の衣裳を纏ひ、松明を翳して歌ひ踊りつつ、勝者ギリシャを皮肉り、その指導者アガムノンやオデュッセウスを待受ける災厄を豫言して連れ去られて行く。

次はヘカベの息子でトロイアきつての勇將ヘクトルの妻アンドロマケが一粒種の幼児アス

テュアナクスを抱いて登場する。アンドロマケを所望したのはヘクトルを斃たふしたギリシャ隨一の勇士アキレウスの息子であった。アンドロマケが「夫の仇」の爲に「賤しい務めをせねばならぬ」運命を嘆いてゐると、「トロイア第一の勇士の胤たね」は生かしておけぬ、「トロイアの城壁からつき落せ」とのオデュッセウスの主張がギリシャ全軍の會議で認められたと布告官から通告される。アンドロマケが幼児を守らうとすると、「力のないのに、力があると思ひ違ひをして」はならぬと布告官は云つて、幼児を連れ去る。

續いて、トロイア王の息子パリスと駈落ちして戦争の原因を成した美女ヘレネが現れる。その夫のメネラオスが不貞の妻を殺しにやつて來たのだが、ヘレネは罪を神々になすりつけ己が無實を強辯きやうべんしようとする。するとヘカベは猛然と噛かみ附いて、ヘレネの心根しんこんの陋劣ろうれつを詰なめる。メネラオスも同調してヘレネを連れ去る。

最後に布告官がアステュアナクスの骸むくろを持つて登場する。ヘカベがそれを見て、おお、可哀さうに、城壁あかに當つて頭から「髪の毛は無残に削りとられ」、骨は碎け、「可愛いこの手」も「ちぎれちぎれに」なつてと、泣き崩れながら埋葬しようとしてゐると、トロイア城が炎上する。ヘカベは燃える城に驅込まうとするが取押へられ、オデュッセウスの奴隸となるべく「ふ

るへる足をふみしめて」歩み去つて行く。

ギリシャ三大悲劇詩人の一人エウリピデスがこの作品を發表したのは、祖國アテナイとスパルタとの間に戦はれたペロポネソス戦争の最中の紀元前四一五年であり、その前年には、アテナイが己が意に従はぬ小國メロスに侵攻して成年男子悉くを殺戮した「メロス島の大虐殺」事件があつた。同時代人のトゥキディデスの「戦史」巻五、「メロス島對談」の章にも、強者アテナイの弱者メロスに對する頗る酷薄な弱肉強食の主張が展開されてゐるが、エウリピデスはこの凄慘な事件に非常な衝撃を受け、アンドロマケの云ふ「ギリシャの名に恥ぢるほどの酷い仕打ち」を敢へて爲した祖國に幻滅して、遙かな異國で一生を終へたと云はれてゐる。が、それはともかく、孫の骸を掻き懐きながらへカベが語る様に、何時の世にも「今の仕合せをかはらぬものと喜ぶのは愚か者」なのであつて、今や國際社會はホーフマンスタールの云ふ力の支配といふ「まやかしのない事實」、メルヴィルの云ふ「剥き出しの力」が一切を支配する「海の世界」の現實が不氣味な本質を露呈しつつあるにも拘らず、日本は今尚「愚か者」の天下である。今に「力のない」現實をとことん思ひ知らされる事にならなければ幸ひである。

（松平千秋譯、「ギリシャ悲劇全集Ⅲ」、人文書院）